

与謝蕪村

四季の俳句

目次

冬	秋	夏	春
·	·	·	·
·	·	·	·
·	·	·	·
·	·	·	·
·	·	·	·
五	三	二	一
一	九	三	

春



春雨や暮れなむとしてけふもあり

春雨が降り続けている。夕暮れが迫ってきたが、暮れそうでも暮れない一日だ。
〔季語〕 春雨

春風や堤（つつみ）長うして家遠し

春風がそよそよと吹くなか、堤の上の道を歩き通している。懐かしい故郷はるか彼方に霞んでいる。
〔季語〕春風

遅き日のつもりで遠きむかしかな

遅々とした春の日が続いている。こうした日々を幾年も重ねるうち、昔もはるか遠く
なつてしまったことだ。
〔季語〕 遅き日

やぶ入りの夢や小豆（あづき）の煮えるうち

やぶ入りで久しぶりに我が家に帰ってきた子どもが、小豆を煮てやっている僅かの間にも横になって眠ってしまった。疲れているのだろうか、きつと楽しい夢を見て
いるんだろう。

「季語」やぶ入り

燭（しよく）の火を燭にうつすや春の夕（ゆふ）

春の日の夕暮れ。燭台から燭台へと灯りをうつしていく。明るくなった室内もまた春らしくのどかであることだ。
〔季語〕春の夕

公達（きんだち）に
狐（きつね）化けたり宵（よひ）の春

なまめかしい春の宵。一人歩いていくと、ふと貴人らしい人に出会った。あれはキツネが化けたに違いない。
〔季語〕宵の春

春雨や

小磯（こいそ）の小貝（こがひ）ぬるるほど

小磯の砂の上に美しく小さな貝が散らばっている。春雨が降ってはいるが、その貝をわずかに濡らすほどだ。
〔季語〕 春雨

春の海ひねもすのたりのたりかな

のどかな春の海。 一日中、のたりのたりと波打っているばかりだよ。
「季語」春の海

春雨にぬれつつ屋根の手毬（てまり）かな

女の子たちの遊んでいる声が聞こえなくなつたと思つたら、いつの間にか春雨がしとしとと降っている。屋根の上には、引つかかつた手まりが濡れている。

〔季語〕春雨

春の夕（ゆふべ）

絶えなむとする香（かう）をつぐ

夕闇が迫ってきた。清涼殿では、女房たちが、絶えようとする香をついでいる。何とも優艶な風情であるよ。
〔季語〕春の夕

滝口に灯（ひ）を呼ぶ声や春の雨

春雨が降りしきり、辺りがひっそりと暗くなってきた。そんな中、滝口には、禁中警護の武士たちが灯を求める声が響いている。

〔季語〕春の雨

片町にさらさら染（そ）むるや春の風

道の片側だけ家並みの続く町はずれ。反対側の空き地には、色も鮮やかに染め上げられた更紗が干してある。折りしも吹き過ぎる春風の心地よさよ。
〔季語〕春の風

高麗舟（こまぶね）の

よらで過ぎゆく霞（かすみ）かな

高麗船が沖合いを静かに通り過ぎていく。こちらの港にも寄らないで、そのまま霞の中に消え入ってしまった。
〔季語〕霞

さしぬきを

足でぬぐ夜（よ）や朧月（おぼろづき）

男がほろ酔い加減で帰宅するなり、部屋の中にごろりと横になる。そのまま足を動かしながら指貫を脱いでいる。外は朧月夜。静かで艶な春の夜の情景である。

〔季語〕朧月

菜の花や月は東に日は西に

夕方近い、一面の菜の花畑。月が東の空に登り、振り返ると日は西の空に沈もうと
しているよ。
〔季語〕菜の花

釣鐘（つりがね）に
とまりてねむる胡蝶（こてふ）かな

物々しく大きな釣鐘に、小さな蝶々がとまって眠っている。何とも可憐な姿だよ。
〔季語〕 胡蝶

畑
（はた） うつやうごかぬ雲もなくなりぬ

畑を打ち続け、ふと手を止めて空を眺めると、さっきまで動かずにいた雲がどこかへ消えてしまっていた。
〔季語〕畑うつ

白梅（しらうめ）に

明くる夜（よ）ばかりとなりにつけり

これからは世俗を離れ、白梅に明ける夜ばかりを迎える身になるのだ。（蕪村の辞
世句の一つ）
〔季語〕梅

ゆく春やおもたき琵琶（びは）の抱きどころ

春が行き過ぎようとするある日、久しぶりに琵琶を奏でようと抱きかかえると、とても重く感じた。これも晩春の物憂さのゆえだろうか。
〔季語〕ゆく春

ゆく春や逡巡（しゅんじゅん）として遅ざくら

散らずにいつまでももぐずぐずと咲き続けている遅ざくら。過ぎ行く春を惜しんで
るからなのだろうか。
「季語」ゆく春・遅ざくら

ゆく春や撰者（せんじや）をうらむ歌の主

春は過ぎ去ろうとしているのに、自分の歌が選にもれた歌詠みが、いつまでも愚痴をこぼしていることよ。
〔季語〕ゆく春

夏



愁（うれ）ひつつ岡にのぼれば花いばら

心が愁うまま近くの岡にのぼると、いばらの白い花があちらこちらに咲いている。
その姿にいつそう自分の憂いは増すようだ。
〔季語〕花いばら

夏川をこすうれしさよ手にぞうり

ぞうりをぬいで手に持ち、素足のまま夏の川をわたる。何ともうれしく、気持ちのよいことだ。
〔季語〕夏川

牡丹（ぼたん）散つてうちかさなりぬ二三片

咲き誇っていた牡丹の花が、わずか数日で衰え始め、地面に花びらが二、三片と重
なつて落ちていく。
〔季語〕牡丹

五月雨（さみだれ）や大河を前に家二軒

五月雨が降り続いて水かさを増した大河がごうごうと流れている。その大河の前に家が二軒建っているが、水の勢いに今にもおし流されてしまいそうだ。
〔季語〕五月雨

涼しさや鐘をはなるるかねの声

早朝の涼しさの中、鐘の音が響いている。一つまた一つと鐘をつくたびに、その音は遠くへ離れていくようで、何ともさわやかだ。
〔季語〕涼し

お手討ちの夫婦（めをと）なりしを

更衣（ころもがへ）

不義密通によりお手討ちになるべきところを許されて、他国に落ちのびたお前と私。
今こうして、ようやく更衣の季節を迎えることができたよ。
〔季語〕更衣

山蟻（やまあり）の

あからさまなり白牡丹（はくぼたん）

大きく真つ白な白牡丹の花びらに、山蟻が這っていく。その黒さが何とも印象的だ。
〔季語〕 牡丹

夕風や水 青鷺（あをさぎ）の脛（はぎ）をうつ

暑い日差しが傾いて、ようやく夕風が立ち染めてきた。川岸では青鷺が脛を水に浸して立っていて、何とも涼しそうだ。

〔季語〕 青鷺

絶頂の城たのもしき若葉かな

山頂に城がそびえ立っている。若葉に囲まれたその姿は、とても頼もしく感じられる。
〔季語〕 若葉

石工（いしきり）の

鑿（のみ）冷したる清水（しみず）かな

夏の日盛りの石切り場。人夫の使うのみも熱くなってきたのが、傍らの清水にずぶりと浸けた。
〔季語〕清水

鮎（あゆ）くれて
よらで過ぎ行く夜半（よは）の門

夜半に門をたたく音に出てみると、釣りの帰りの友が鮎を届けてくれ、寄っていき
というのに、そのまま立ち去ってしまった。厚い友情を感じつつも、私は門のそば
に立ち尽くすのみであった。

〔季語〕 鮎

不二（ふじ）ひとつづみ残して若葉かな

辺り一面、若葉にうずめられているが、くろぐろとした富士山だけがぼっかり残っている。
〔季語〕 若葉

みじか夜や毛虫の上に露（つゆ）の玉

夏の短い夜が明けた頃、庭先では、毛虫の毛の上に露の玉がきらきら輝いている。
「季語」みじか夜

ほととぎす平安城を筋違（すぢかひ）に

ほととぎすが鋭い声で鳴きながら、平安京を斜め一直線に飛んでいった。
「季語」ほととぎす

秋



朝顔や一輪（いちりん）深き淵（ふち）のいろ

すがすがしく朝顔が咲いている。その中の一輪は、底知れぬ淵のような深い藍色をして、まことに美しい。
〔季語〕朝顔

四五人に月落ちかかる踊（をどり）かな

夜も更けて、月は西に落ちかかっている。その光を浴びて、四、五人の男たちがまだ踊り続けていることだよ。
〔季語〕 踊

湯泉（ゆ）の底にわが足見ゆるけさの秋

朝の温泉にひたつて、その透き通った湯の底に、青白くほっそりした自分の足が見える。辺りはすでに初秋の気配だ。
〔季語〕けさの秋

天心貧しき町を通りけり

夜半の月が中空に輝いている。その月の光を浴びながら、貧しい家々の立ち並ぶ町を通ると、どの家からも灯りは洩れず、ひっそりと寝静まっている。
〔季語〕月

白露や茨（いばら）の刺（はり）にひとつづつ

秋も深くなり、あたり一面に露が降りている。いばらに近づいてみれば、その鋭い刺（とげ）の先の一つ一つに露の玉がくっついて輝いている。
〔季語〕 露

灯籠（とうろう）を三たびかかげぬ露ながら

亡き友の新盆にあたり、灯籠をかかげたが、数えてみるともう三度目になる。露に濡れた灯籠を見ると、なおいつそう悲しさがこみあげる。

〔季語〕 灯籠

鳥羽殿へ五六騎いそぐ野分（のわき）かな

野分が吹き荒れる中、五、六騎の武者たちが鳥羽殿に向かって一目散に駆けていく。その後を追うように、野分はなお激しく吹きつっている。
〔季語〕野分

柳散り清水かれ石ところどころ

柳が散り、清水は枯れ、石がところどころに露出している。わびしい秋の風景であることよ。
〔季語〕柳散る

落穂（おちぼ）拾ひ

日あたる方（かた）へあゆみ行く

秋の日差しが山の端にかかり、広い田んぼの一部を照らすばかりになった。農夫が落穂を拾いながら、日の当たる方へ移っていく。
〔季語〕落穂

山は暮れて野は黄昏（たそがれ）の
薄（すすき）かな

遠くの山々はすでに暮れてしまっただが、近くに見える野はまだ暮れなずんでいてほ
の明るい。薄が風にゆれている。
〔季語〕薄

冬



易水（えきすゐ）にねぶか流るる寒さかな

戦国時代の中国、荘土が悲壮な決意で旅立ったという易水に、真っ白な葱（ねぎ）が流れている。そのさまは何とも寒さが身に沁みる。
〔季語〕寒さ

斧（おの）入れて香（か）におどろくや冬木立

冬木立の中にやって来て、枯木と違って斧を打ち込んだ。ところが、新鮮な木の香りが匂ってきて驚いた。
〔季語〕冬木立

葱（ねぎ） 買うて枯木の中を帰りけり

町で買ったねぎをぶら下げて、葉の落ち尽くした冬木立の中を一人で帰ってきたことだよ。

〔季語〕 葱・枯木

うづみ火や終（つひ）には煮（に）ゆる
鍋のもの

火鉢の炭は灰にうづまっっている。その上にかけてある小さな鍋はいつ煮えるとも分らないが、まあそのうち煮えるだろう。
〔季語〕うづみ火

楠（くす）の根を静かにぬらす

時雨（しぐれ）かな

大木となった楠の木。その根元を時雨が静かに濡らしている。何と森閑とした風景だよ。
〔季語〕時雨

宿かせと刀（かたな）投げ出す吹雪かな

外は吹雪。旅人が家にころがりこんできて、宿を貸してくれというより早く、刀を投げ出して腰を下ろしたことだよ。

〔季語〕吹雪

水鳥や提灯（ちやうちん）遠き西の京

暗い池のほとりにたたずむと、水鳥の音がかすかに聞こえてくる。はるか西の京あたりに目を向けると、提灯の明かりが動いており、それも遠くかすかである。
〔季語〕水鳥

寒月や衆徒（しゆと）の群議の過ぎて後（のち）

明日の戦いの評定を終えた僧兵たちが去っていった。そのあとには寒々とした冬の月が中空に輝いている。
〔季語〕寒月

水鳥や枯木の中に駕（かご）二挺（にちやう）

冷たい水面に、水鳥たちが泳いでいる。対岸の冬木立の中には、かごが二挺乗り捨てられていて、辺りには誰もいない。
〔季語〕水鳥

与謝蕪村

四季の俳句

発行 二〇二一年六月一日

選者

横須賀市長浦町二二

〇四六 八二三 三九八一

印刷

有限会社 三栄社